



### 国際航路協会アジア地区 125 周年 記念事業が名古屋で成功裏に開催 されました

PIANC-Japan 事務局

平成 22 年 9 月 12 日から 14 日の間、ウエスティンナゴヤキャッスルと名古屋港湾会館で PIANC 設立 125 周年を記念する事業が開催されました。

12 日の記念式典には、皇太子殿下がご臨席され、前原国土交通大臣、神田愛知県知事、河村名古屋市長、デネーデ PIANC 会長など 41 カ国から約 700 人が出席しました。

12 日と 13 日には「内陸水運と地域振興」および「浚渫と環境」をテーマとしてセミナーが開催され、各国の研究者からの発表並びに活発な意見交換がなされました。

その他、歓迎レセプション、水族館ディナー、船による名古屋港視察、名古屋城やトヨタ博物館見学、文化体験、同伴者ツアー、送別会など盛りだくさんの催し物等を含め記念事業は成功裏に開催されました。

これら記念事業の詳細は PIANC-Japan ホームページ (<http://www.pianc-jp.org>) に掲載しています。

### 海港委員会 (MarCom) 出席報告

(社)日本港湾協会企画部長  
樋口嘉章

このたびオステンデ (ベルギー) で開催された標記委員会に初出席してきましたので、その概要を報告します。

MarCom の会議は 2010 年 9 月 23 日(木)の 9 時から 18 時半まで、オステンデの Maritime Access Division 事務所で開催されました。MarCom メンバーの出席者は 13 名、Caude 委員長は所用のため欠席だったので、secretary の Jean-Bernard Kovarik の司会で開催されました。主な議論とその結果は下記の通りです。

- ① 出席委員の確認  
ベルギーの Van Damme 氏が 2011 年に引退した後、後継となる可能性の高い Verhaeghe 氏と、YP の Andersson 氏(フィンランド) がオブザーバーとして参加。
- ② 前回 (於リヴァプール) 議事録の確認
- ③ ExCom およびアジア地区 125 周年記念事業 (名古屋) の報告
- ④ WG144 の目次の承認
- ⑤ 進行状況
  - ・ WG47 (防波堤タイプの選択) 最終報告書待ち。次回の MarCom でレビューの予定。
  - ・ WG48 (バウ・スラスト) 文章は出来ているが、図表が未完成であり、2010 年末には最終稿となる見込み。
  - ・ WG49 (航路水平鉛直寸法) 2011 年に MarCom での報告予定。予定が伸びていることについて、日本側より早急に報告書をまとめるよう要請した。
  - ・ WG51 (水注入浚渫) 2010 年に最終レポート本部送付予定。
  - ・ WG52 (コンテナ船の積み込み (降ろし) 基準) 本日第 1 稿の発表。2011 年最終レポート本部送付予定。
  - ・ WG53 (津波災害の緩和)最終レポートを本部に送付済み。印刷される最後の報告書となる見込み。

- ・WG54 (港湾への安全なアクセスのための海象・気象情報活用) 2011 年に MarCom での報告予定。日本の NOWPHAS についても紹介することが提案された。
  - ・WG55 (オイル・ガスタンカーの接岸作業の安全性) 2011 年 2 月に MarCom での報告予定。
  - ・WG56 (ウォーターフロント防護へのジオ・テキスタイルの適用) 今回の MarCom で報告。
  - ・WG57 (護岸被覆材の安定性) メンターが van der Weck に交代した。2011 年に MarCom で報告予定。
  - ・WG135 (中小規模港湾のコンテナ・ターミナル設計基準) フランスがル・アーヴル港の Marinier 氏を Le Van 氏の後継として指名。ドラフト・レポートが WG メンバー間で検討されている。(2012 年に報告予定?)
  - ・WG144 (浚渫土・岩の分類) WG が活動を開始した。
  - ・WG145 (接岸速度と防舷材設計) 今年中にキック・オフ (於ブリュッセル) の予定。
- ⑥ 新しい WG 等の立ち上げ
- ・港湾のマスタープラン
  - ・エネルギーのマネジメントと構造
  - ・巨大船と操船
  - ・港湾構造物のための設計基準やガイドラインの通覧 (EG)
  - ・沖合の風車と航行の関係
  - ・港湾施設の維持管理
- ⑦ 新規 WG の立ち上げ
- ・WG146 (固体バルク貨物の浮体積み替えターミナル) 2009 年 ExCom で承認。
  - ・WG147 (レクリエーション・漁業・商業航海の調整) については、イタリア側より懐疑的な意見が出された。
- ・WG152 (クルーズターミナルのガイドライン) 2010 年 ExCom で承認。
  - ・WG153 (海洋オイルターミナルの設計に関する勧告) 2010 年 ExCom で承認。
- ⑧ WG52 (コンテナ船の積み込み (降ろし) 基準) のレポートの報告  
ドラフト・レポートが Mohns 氏より発表され議論された。2010 年中にドラフトレポートを完成させ、2011 年 2 月の MarCom で議論されることとなった。
- ⑨ WG56 (ウォーターフロント防護へのジオ・テキスタイルの適用) のレポートの報告  
ドラフト・レポートが Voskamp 氏より発表され議論された。数週間の内に最終版とすることとされた。
- ⑩ 他の委員会との共同  
EnviCom Working with nature  
PIANC PTG 気候変動  
EnviCom WG150 グリーン・ポート  
EnviCom WG136 持続可能な海洋航行  
MarCom/InCom EG Direct accessibility of maritime navigation  
InCom WG140 内陸水理施設の半確率論的設計コンセプト  
RecCom/MarCom WG 147⑦に既出
- ⑪ MarCom の特別な活動
- ・出版済みの書籍に間違いが見つかったときの対応について
  - ・用語集については次回会合で引き続き議論することとなった。
- ⑫ 次回会合  
次回会合は PIANC 本部又はロッテルダム (蘭) において 2011 年 2 月 2 日 (2 月 3 日にはロッテルダム港のマースフラクテ II 視察) 開催することとなった。その次はニュー・オーリンズ (米) において 2011 年 9 月 15 日~16 日開催予定 (今後調整)。

## MarCom WG145「接岸速度と防舷材の設計」が開催されました

WG145 共同委員長 上田 茂

11月19-20日ブリュッセルのPIANC本部で、WG145「船舶の接岸速度と防衝工」のKOMーティングが開催されました。この課題については、1984年及び2002年にPIANCの報告書あるいはガイドラインが作成されていますが、近年の船舶の大型化に伴い、これらの報告書に記載されている船舶接岸速度を実態に合わせて見直し、設計に反映させようという意見があり、前回のWG33からおよそ10年で改めて検討することとなった。WG設置の提案がどのようにしてなされたかは、小職には分かりませんが、これまでの意見交換から推測すると、コンテナ船やバルク船の急激な大型化に伴い、主としてヨーロッパの主要港における限られた水域での接岸操船と防衝工の設計が重要課題として浮上したものと思います。

5月のリバプール kongress で、このWGのチェアマンをイギリスのMike Harissonと共に拝命することになり、OCDIブリュッセル駐在の成川和也氏に事務局をお願いして、第1回目の会議を準備しました。Mikeの日程がタイトであったことと、無償の会議室(PIANC本部)の空席状況から、延び延びになりこの日になりました。

まず、メンバーを表にします。

MarComのメンター(調整役)を含めて23名で、その内16名が出席しました(斜体)。所属別に見ますと、政府・港湾管理者4名、学識経験者2名、防舷材メーカー及びコンサルタント5名、建設コンサルタント及び建設会社12名という構成です。出席

者の自己紹介によると、設計コンサルタントが多いこと理由の一つに、この分野への進出に関心を持っていることが考えられます。防舷材メーカーはトレレ社から2名、他の3名は防舷材コンサルタントです。

以下は、出席者です。

- Dr. Shigeru Ueda (M : 学識経験者) : 日本
- Mr. Mike Harrison (M : 防舷材コンサルタント) : イギリス
- Mr. Pierre-Francois Demenet (M : 建設コンサルタント) : フランス
- Mr. Jacques Failly (AL : 建設コンサルタント) : フランス
- Ms. Elizabeth C. Burkhart (YP : 建設コンサルタント) : アメリカ
- Mr. Christopher J Forgan (CR : 防舷材コンサルタント) : イギリス
- Mr. Tom van Autgaerden (YP : 港湾管理者) : ベルギー
- Mr. Leon Groenewegen (M : 建設コンサルタント) : オランダ
- Mr. Alfred. Roubos (YP : 港湾管理者) : オランダ
- Dipl.-Ing Patrick Friede (M : 建設会社) : ドイツ
- Mr. Joep Wijffels (M : 建設コンサルタント) : ベルギー
- Ms. Elena Rodriguez La Ossa (M : 建設コンサルタント) : スペイン
- Mr. Marco Gaal (CR : 防舷材メーカー) : オランダ

	政府 港湾管理者	学識経験者 大学等	防舷材メ ーカーコンサル タン	建設コンサル タント、建設会社	
日本	YP	M			2(2)
イギリス			M, M, CR		3(3)
フランス			AL	M	2(2)
オーストラリア				M, CR	2(0)
アメリカ				YP	1(1)
ドイツ				M, AL, YP	3(1)
ベルギー	YP			M	2(2)
オランダ	YP, MarCom		AL	M	4(4)
ノルウェー		CR		M	2(0)
スペイン				M, AL	2(1)
	4(4)	2(1)	5(5)	12(6)	23(16)

M:メンバー, YP:ヤングプロフェッショナル, CR:通信メンバー, AL:代理メンバー  
( )出席者;斜体

Mr. Mark Fowler (CR : 防舷材メーカー) : イギリス

Mr. A. van der Weck (Mentor : MarCom) : オランダ

Mr. Kazuya Narukawa (YP:OCDI) : 日本

会議は、以下に示す議事次第のように進められました。

#### 第1回 PIANC MarCom WG145 議事概要

1. 29日午後1時開会:13名が時刻どおりに参集。3名が遅れて参加。

PIANC本部が会議室、コーヒーおよびランチを準備してくれた。今回は、初日はランチ前に集合し、その後議事に入ることとした。

2. 上田から開会の宣言と、メンバーへ謝意を表明

3. 議長及び事務局並びにメンバー自己紹介

4. WGの目的を確認:船舶の接岸速度データの取得と集積並びに設計への活用

5. MikeがUKセクターでのこのWGに関する現況説明の状況を報告

6. 上田が、レーザーによる接岸速度の測定事例として、海翔丸および山瀬氏の測定事例を紹介。またGPSによる接岸速度システムを紹介した。

7. 各ポートオーソリティーにおける接岸速度測定事例の照会したが、特段回答なし。

8. ポートオーソリティー、OCIMF、IAPHなどにアンケートして、まず接岸速度測定の有無を確認して、測定している場合にはデータの提供を求めることとした。ヨーロッパのメンバーはそれぞれ分担した。日本及び東南アジアは港湾局およびOCDIを通して照会する旨コメントした。

9. ベルギーでは操船シミュレータによって接岸速度を求めている旨紹介があった。上田から、実船との比較がなされているか質

問したが、回答はなかった。

10. 上田から、2010リバプール kongress に提出した、Reliability Design of Fender Systemを紹介し、日本のN港、マレーシアのM港のデータを比較して説明した。両港とも遮蔽された港であるが、接岸速度に相違が見られる。この原因は操船技術にあることを説明し、一概に遮蔽された港湾で同一の接岸速度をとることができないことを説明した。したがって、各港における接岸速度の測定と解析が必要であることを強調した。

11. 上田から、メンターのWeck氏に対し、TORに記載されている最新の測定装置による接岸速度の測定がなされている港湾について情報提供を求めた。Weck氏はTORの執筆者が不明で詳細は分からないと答えた。

12. 接岸速度の測定事例は日本の大型タンカー、守屋氏らの測定事例、山瀬氏らの測定事例以外に無い恐れもあるので、港湾管理者へのアンケートでは少なくとも設計接岸速度を回答いただくようお願いする。

13. 接岸速度以外に設計に関する事項では、UKCを考慮した付加質量、パネル、フェリーのエンドフェンダーなどの項目が挙げられた。対象船種は、コンテナ、バルク、大型クルーズ船、フェリーなどに拡大する意見があった。また大型船の定義について議論し、概ね5万トン以上とするが、コンテナ、バルク等は10万トン級に着目することとした。

14. 対象がやや拡散しそうであったので、まず接岸速度の測定事例について調査することとし、設計に関する事項はその後検討することが望ましいとの意見を述べた。

15. Guide Line 2002に対する日本側の意見を紹介した。詳細は次回に山瀬氏が説明する旨のべた。

16. Weck氏から他のWGとの情報交換をするよう勧められた。各国で当該委員との連絡を取ることにした。

17. 遮蔽されていない港湾では主として波の影響を受けて船舶が動揺するので、係留船舶の動揺を考慮する必要性を述べ、次回にその事例として港湾技研資料（上田、白石）を紹介することとした。
18. 次回は3月16、17両日とするが、17日午後はアントワープ港見学を予定する。詳細は成川氏とTom（ベルギー）で調整する。
19. 次回から山瀬氏が日本側の追加の委員として出席することを了承した
20. 第三回以降の予定は、  
三回目：2011年9月；ロンドン、（ICEで開催できない場合にはブラッセル）  
四回目：2012年3月；ロンドンまたはブラッセル（ロッテルダムも可能性あり）  
五回目：2012年9月－10月東京、報告書提出  
編集会議：その後の適当な時期；ブラッセル；終了

21. 印刷にはスポンサーを見つけるようPIANCが勧めている。WG33のときはトレレがスポンサーになったようである。

以上ですが、接岸速度データの収集が当面の課題ですが、困難が予想されます。少なくとも設計接岸速度の情報収集は行いたいというのが私の心境です。また、欧米では操船シミュレータを設計接岸速度情報収集の資料として用いようとの動きがあります。

帰国後、12月14日に国土交通省で報告会と意見交換が行われました。接岸速度データ収集に関して、国土交通省にご協力を求めると共に、委員各位に次回に向けての資料作成等準備をお願いしました。沿岸センターの山本さんから、オイルターミナルの設計接岸速度情報を求めることと、設計接岸速度設定に関してAISの活用について国総研とのコンタクトを取ることが勧められました。

以上